

# 『反マキアヴェリ論』の成立ならびに 諸版の異同について

ーフリードリヒ大王の思想構造 1ー

屋敷二郎

フリードリヒ大王 (Friedrich II, der Große : 1712~1786 ; 在位1740~1786) は、皇太子時代よりフランス文芸に関心を抱き、ヴォルテール (1694~1778) らと親交が深かった。彼は政務の傍らで著述にいそしみ、その成果は『フリードリヒ大王全集 (Œuvres de Frédéric le Grand)』全31巻 (1846~57) という形で集大成されている。マキアヴェリ (1469~1527) の『君主論 (Il principe, 1513)』に各章ごとに批判を加えた『反マキアヴェリ論 (L'Anti-machiavel, 1740)』は、彼の著作の中で最も有名なものであると共に、とりわけ「君主は人民の第一の下僕 (le premier domestique)」という一節は、啓蒙絶対君主としての彼の思想を象徴する言葉とされている。しかしまた、今日とりわけ我が国においては、この書物が実際に読まれて分析されることはあまりなく、彼が出版直後にシュレージエン侵略 (オーストリア継承戦争 : 1740~48) を開始したことで単純に対比して、啓蒙思想に口先だけ帰依したものにすぎない、と簡単に片付けられているようである。

その際にしばしば引き合いに出されているのは、彼がアルガロティ伯爵 (Algarotti) に1740年10月28日付で書き送った書簡 (Œuvres XVIII, 22) である。「皇帝の死は私の書物にとっては不幸ですが、あるいは私自身には栄光をもたらすかもしれません」という彼の言葉は、即位前の啓蒙主義かぶれを脱し、権力政策に専心していく決断を示したものの、マキアヴェリズムへの帰依を宣言したものと理解されている。ところが、この言葉は、「皇帝 [カール6世] の死は私を芳しからぬ本の校訂者たらしめないのです」という言葉のすぐ後に続くものである。これは何を意味しているのだろうか。フリードリヒは、皇太

子時代の理想主義的な著作を、より現実主義的なもの、侵略を正当化するようなものに改訂しようとしていたのだろうか。この答えは、本論において明らかにされるであろう。

本論考は、フリードリヒの残した書簡を手がかりに『反マキアヴェリ論』の成立ならびに出版の過程を追ひ、その過程で生じた幾つかの版の異同について検討するものである。これまでの研究は、フリードリヒが国王であったという事実に拘泥して、啓蒙思想家という側面を等閑視してきた。しかし、彼は18世紀における偉大な、影響力あるフィロゾフの一人であり、彼自身そのことを自覚していたのである。思想史研究においては、詳細な成立事情を知ることが当然の前提となる。本論考はそのような準備作業であり、フリードリヒ大王の思想構造を解明する鍵を与えるものである。

## I 成立過程

『反マキアヴェリ論』の成立史に関しては、幾つかの先駆的業績があるが、その中でも優れているのが、ゾンマーフェルトの論文<sup>(1)</sup>である。本章ならびに次章を作成するうえで、この論文は非常に参考になった。ただし、これには出版の経緯がほとんど記されていないため、不完全なものである。ハイデマンの論文<sup>(2)</sup>はこの点を多少は補うものであるが、逆に成立過程そのものの記述は簡単なものである。近年、ヴォルテールの『回想録 (Mémoires pour servir à la vie de M. de Voltaire, écrits par lui-même)』が邦訳された<sup>(3)</sup>。これはフリードリヒとの関係に関する「悪意に充ちた誹謗文」(ハイデマン)とも言われ、実際に事実と食い違っているのだが、興味深い読み物でもある。本章ならびに次章の目的は、『反マキアヴェリ論』の成立と出版の経緯を包括的に概説することであり、正確な理解の前提となる基本的な知識を提供するものである。

フリードリヒが初めてマキアヴェリの名前を文字にしたのは、1738年3月31日付のヴォルテール宛書簡(Br. V. 55.)である。すでに親交のあった両者は、文学・哲学・社会などの話題について書簡を取り交わしていたのだが、この年の始めに、ヴォルテールは『ルイ14世の世紀 (Histoire du Siècle de Louis XIV)』の最初の二つの章を書き上げ、フリードリヒに贈呈した。フリードリヒはこのことに感激したのだが、マキアヴェリを当時の偉人に数えている点に

は不満をもらした。「私は貴方が私の見解を代弁してくれていると確信しています。軽蔑すべき悪党の色褪せた声望の評価を高めたいと望むには、貴方はあまりに誠実な人です。私は、貴方がマキアヴェリを天才の部類だと考えていないことも確信しています。」これを受けて、ヴォルテールはマキアヴェリの名前を削除して、皇太子の「徳高き憤激」を称揚した。6月17日には、フリードリヒはこのことに関して満足の意を表している (Br. V. 60.)。

マキアヴェリの名前が次に現われるのは、1739年3月22日付のヴォルテール宛の書簡 (Br. V. 87.) である。ここで初めてフリードリヒは、『反マキアヴェリ論』の執筆計画について言及したのである。しかし、ゾンマーフェルトは、1月8日付の書簡 (Br. V. 78.) がすでに執筆計画を示唆していると考えている。「私はまた、非常に困難で非常に大胆な計画を準備しています。けれども、それについて貴方が知るのには、私が自己の力を小手調べ (l'essai) した後でしょう。」ここで述べられている「小手調べ」にあたる小品は現存していないので、ゾンマーフェルトは『君主論』を精読したのではないかと考えている<sup>(4)</sup>。もっとも、フリードリヒ自身が『反マキアヴェリ論』の前編として位置付けている『アンリアードへの序文 (Avant-Propos sur la Henriade de Mr. de Voltaire)』であった可能性もないではない。これは、アンリ4世 (Henri IV : 在位1589～1610) を讃えたヴォルテールの叙事詩『ラ・アンリアード (La Henriade)』に心酔して、フリードリヒ自ら著したものである。しかし、後述するように、『アンリアードへの序文』では成立時期からみて遅くなりすぎるので、やはり『君主論』の精読と考えた方がよいであろう。ともかく、3月22日付の書簡では、次のようにより明確に述べられている。「私はマキアヴェリの『君主論』に関する作品を考えています。全てが私の頭の中でいまだに彷徨っているので、この混沌をとき解すには、神の助力が必要でしょう。」

これ以後、両者の間では『反マキアヴェリ論』に関する話題が多くなる。ヴォルテールはこの計画に並々ならぬ関心を抱き、フリードリヒを励ましている。1739年5月16日付のヴォルテール宛書簡 (Br. V. 91.) では、執筆の開始が告げられている。「私はマキアヴェリ『君主論』の批判に従事し、すでに作品を書き始めました。彼の諸原則は、徳にも君主の真の利害にも合致しないものとして、完全に反駁されています。」徳と利害の両面からマキアヴェリを論駁する、という意図がここで言明されているが、その点でこれまでの研究は「道徳」

対「現実主義」という図式に拘泥していたように思われる。

さて、フリードリヒは執筆を進めるにつれて、意外に困難な仕事であることに気付く。「マキアヴェリについて書かれた全てを知るには、大量の本を読まねばなりませんし、全てを消化するためにも時間が必要です。」しかし、東プロイセン視察旅行や日々の執務が執筆を妨げている、と6月26日付の書簡(Br. V. 95.)は訴えている。この書簡では、『反マキアヴェリ論』が『アンリアードへの序文』の続編として位置付けられ、「私は、まさにアンリ4世の偉大な見解に基づいて、チェザーレ・ボルジアを打ち破る雷を鍛造します」と記されている。アンリ4世は「まさに新ストア的精神のもち主だった」<sup>(5)</sup>のであり、ここからも、フリードリヒが単なる「徳治」の信奉者ではないことが分かるであろう。

この年の秋には、フリードリヒは再び執筆に没頭できるようになった。彼は、9月9日付で『アンリアードへの序文』をヴォルテールに贈呈した際に、今度は『反マキアヴェリ論』と真剣に取り組む旨を伝えている(Br. V. 103.)。10月10日付の書簡(Br. V. 105.)においては、『君主論』を章ごとに反駁するという形式を採用すること、幾つかの章が完成したこと、全部が完成した暁にはヴォルテールに手直ししてもらいたいこと、等々とある。ヴォルテールによる手直しをフリードリヒが望んでいたのは、この作品を出版することが念頭にあったからであろう。もっとも、後述するように、この段階ではまだほんの語法ないし文法的な誤りの訂正だけが期待されていた。ヴォルテールもまた、9月9日付書簡への返事(10月18日付ヴォルテール発書簡: Br. V. 106.)において、作品の完成と公刊への期待を表明している。「私はまだアムロ・ドゥ・ラ・ウセイ(Amelot de la Houssaye)の註釈を持っておりませんが、いかなる註釈が、殿下が虚偽を見抜き悪人をやりこめるために必要でしょうか? 祝福されましょう、殿下が愛すべき御手で作品を完成するであろう日は。人類の幸福はこの作品にかかっておりますし、またこの作品は、国王たちの教理問答(l'catechisme des rois)となるべきものであります!」

この作品の執筆は、もちろんヴォルテールとの間だけの秘密ではなかった。ヴォルテールの愛人であったシャトレ侯爵夫人(la Marquise du Chatelet)宛の10月27日付の書簡(Œuvres XVII, 35)には、次のようにある。「私はマキアヴェリ論をあと2週間で仕上げる見込みです。不完全で未熟な作品を公にし

たくないで、多く書き、それ以上に削っています。……貴女に序論を送ります。……貴女の判断と好悪は、私にとって公衆のそれを意味します。どうか包み隠さずに貴女の意見を教えていただきたい。」ここに同封されていた草稿は、自筆のものであったという。2日後のアルガロティ宛の書簡（Œuvres XVIII, 5）では、出版に関する具体的な話がなされている。「私は、マキアヴェリ君主論〔の駁論の執筆〕を3週間後には終えているものと考えています。その時にまだ貴方はロンドンにいらっしゃるでしょうから、出版の世話を頼むことになるでしょう。」

アルガロティには完成後すぐに出版する意向を伝えたにもかかわらず、それは甘い見通しであった。11月6日付のヴォルテール宛書簡（Br. V. 108.）で、待望の『反マキアヴェリ論』の草稿が完成したことが伝えられたが、永遠に残るよう見直しを始めたために、出版どころではなくなったのである。「私は今や、第一章から新しいものまで、後世に受け継がれるように、訂正を施して作品をできるだけ立派なものにしようと、取り組み始めています。」ここから分かるように、この段階では、フリードリヒは独力で作品を仕上げ、若干の字句や文法の訂正だけをヴォルテールに期待していたのである。なお、この書簡において、匿名出版の意向が告げられた。匿名出版の意向はその後繰り返し言及された（例えば、1740年2月3日付の書簡：Br. V. 115.）のであるが、このことからフリードリヒの意気込みがよく分かる。著者の声望と無関係に愛読され読みつがれていくことこそ、著述家の理想だからである。もっとも、彼自身自覚していたように、当時の諸外国について明け透けに論じすぎたために、到底プロイセン皇太子の名前で出すわけにはいかなかったことも確かである。

この書簡とともに、『反マキアヴェリ論』の5つの章がヴォルテールに送付された。これは最初の5章というわけではなく、その中に第20章が含まれていたとされる。「まだ磨かれていない大理石の原石の数片」というフリードリヒの言葉から、ゾンマーフェルトはこれらが第一草稿だったのではないかと考えている<sup>(6)</sup>。なお、フリードリヒ自身が伝えているように（1740年1月10日付ヴォルテール宛書簡）、これらは先の序論とは異なり、書記官ジェラルドが筆写したものであった。これ以後、フリードリヒは修正が進むたびにヴォルテールに草稿を送って鑑定してもらうようになる。

フリードリヒはすでに修正を加えた草稿から、まず1739年12月4日に最初の

12の章をヴォルテールに送付した。同封の書簡(Br. V. 110.)で彼はヴォルテールに、「この子供たちの推定上の父(le pere putatif de ces enfants)」となって、フランス語を手直しするように依頼している。ヴォルテールは、この書簡に対する返事(12月28日付: Br. V. 111.)で、序文と編集を担当することを申し出たほか、草稿に関して、非常に注意深い表現で、熱情を抑え理性的に叙述するように教示している。「この美しい樹には取りのぞいたほうが良い二、三の枝がございます。強奪者や暴君の教師に反対する熱情は、殿下の高貴な魂を消耗させ、時とすると殿下を激情に惑わせます。欠陥はございますが、それは徳に非常に類似しております。永遠の善なる神は永遠の欠陥をも有する、といえます。けれども、マキアヴェリについて誠実に罵言を述べるときに、理性を保ったままで述べることも出来るのです。」

さらに引き続いて、1740年の1月6日には5つの章が(Br. V. 112.), 2月3日には最後に残る第22, 24~26章が(Br. V. 113.)発送され、結局全ての章がヴォルテールに届いたのは2月20日のことであった。この2月3日付のヴォルテール宛書簡(Br. V. 115.)では、ヴォルテールが表現を直すよう(とくに緩和するよう)注意した箇所について、見なおすことを決心し、彼に「余計だと思われる全ての罵言を除去し、言語の純粋さに反する私の誤りを大目に見たりしないよう」頼んでいる。これを受けた2月23日付のヴォルテールの書簡(Br. V. 116.)は、幾つかの長すぎる章を縮減し、各章の冒頭にある『君主論』の引用を削除し、マキアヴェリの論じていない事柄に関する議論を除去し、マキアヴェリの論理に打撃を与え得るような歴史的事例を追加することを提案している。この第二番目の提案には補足が必要であろう。ヴォルテールは出版に際して、『君主論』のフランス語訳を頁の左半分に印刷しようと考えていたのである。ただ、そこで用いられたのは当時最も優れたフランス語訳とされていたウセイによる翻訳であったが、プロイスが示したように<sup>(7)</sup>、フリードリヒの用いたのはアンリ・デボルド(Henri Desbordes)が1696年にアムステルダムで出版した訳本であったので、引用文と付録の原文とが食い違うという結果になった。

この提案に基づいて「第二草稿」が作成された。この「第二草稿」では、各章の冒頭にはもはや『君主論』の要約は付されていない。しかし、その他の提案は、あまり顧慮されなかったようである。この草稿が完成した後も、フリー

ドリヒは修正に努力していた。ちなみに、ゾンマーフェルトによれば<sup>(8)</sup>、この「第二草稿」にフリードリヒ自身がさらに手を加えたものが、『マキアヴェリ君主論の駁論 (Réfutation du prince de Machiavel)』と名付けられて今日『全集』に収録されているものである。またこの原稿はヴォルテールに送られた最後の原稿でもあり、したがって『駁論』とヴォルテールの加工した『反マキアヴェリ論』との最後の共通の土台となった。しかし、父王フリードリヒ・ヴィルヘルム 1 世 (Friedrich Wilhelm I : 在位 1713~1740) の病状が悪化して、事態は急変する。3月19日付アルガロティ宛書簡 (Œuvres XVIII, 14) で、尚もオランダでの出版を言明してはいたが、作業は停止しつつあったのである。「私は現在、マキアヴェリ論の幾つかの章を改良していますが、しかし、私の置かれている気掛かりな情勢の中で、ほとんど「改訂作業」はかどっておりません。」このように、プロイセンの皇太子は3月23日付の書簡 (Br. V. 121.) でヴォルテールに伝えている。4月26日には、彼はついに推敲をヴォルテールに委ねてしまうことを決意した (Br. V. 125.)。「私の置かれている不安の中で、マキアヴェリ論を校訂するための時間も精神的安定も見いだせません。私は貴方に私の作品を委ねます、それが貴方の手のもとで一層優れたものとなることを確信して。合金から金を選び分けるには、貴方の坩堝 (votre creuset) が必要なのです。」

## II 出版過程

こうして主導権は今やヴォルテールの側に移った。すでに「共著者の領域に踏み込んでいた」(ゾンマーフェルト) ヴォルテールは、今や主体的に行動し始める。6月には出版交渉が始まった。6月1日付のヴォルテール発の書簡 8 Br. V. 129.) には、「私は今日オランダの本屋に【出版依頼の】手紙を書きました」とある。この出版業者は、ジャン・ヴァン・デューレ (Jean van Duren) という者で、以前からヴォルテールと取引があったという。この出版依頼の「手紙」は、デューレが自己の版の正統性を示すために、『第三版』に付したものである。「私の手にはさる名望あるヨーロッパ人の著した、風変わりな手稿がある。これはマキアヴェリ『君主論』の一種の駁論であり、興味深い事実や大胆な省察に充ちているので、読者の好奇心を刺激し、出版業者に利益をもたらすものである。私は多少の修正をして出版させるように委任を受けた。」条

件として挙げられたのは、筆写して手稿は送り返すこと、慎重に印刷すること、完成した本の美装版を後で指定するドイツの宮廷に24部、普及版をヴォルテールに24部それぞれ送付すること、手稿の由来については絶対に沈黙を守ること、頁の左半分には『君主論』を印刷し、ヴォルテールの序文を付すること、等々であったようである。

デューレは即座に承諾したので、ヴォルテールは6月27日までに修正済みの手稿を彼に渡した。しかし、こうした出版交渉が行なわれている間に、5月31日にフリードリヒ・ヴィルヘルム1世が崩御して、皇太子フリードリヒは、プロイセン国王にしてブランデンブルク選帝侯たるフリードリヒ2世として即位したのである。今や国王となった『反マキアヴェリ論』の著者は、迂闊な発言、とりわけフランスに対する批判は絶対に許されぬようになった。新王はただちにヴォルテールに対して、損害賠償と引き替えに出版を中止させるように指示を下した。この6月27日付の書簡(Br. V. 136.)には、ヴォルテールが持ち歩いたのか、その続きの部分が欠落している。

交渉は難航した。デューレは我関せずとして、応じなかったのである。2000グルデンもの賠償金も無駄であった。交渉過程に関するヴォルテールの興味深い報告は、フリードリヒへの7月10日および日付不明の書簡(Br. V. 139. u. 140.)に見られる。結局、ヴォルテールは、政治問題になりかねないような箇所を削除したり曖昧にしたりした他は、無意味なことを行間に書き加えるなどの消極的な抵抗をしたにすぎなかった。8月2日付のヴォルテール宛書簡(Br. V. 142.)では、フリードリヒはヴォルテールに添削を一任し匿名での出版を告げているが、これは仕方なく公刊を許可したものと考えられる。「私は、忙しく憂鬱な儀式〔誠実宣誓〕の日に、貴方の3通の書簡〔先の二通と散逸した一通〕を受け取りました。私はそのことで貴方に感謝しています。現在のところ、私が貴方にしてあげられるのは、マキアヴェリ論を貴方の処分に委ねることだけです。私は、貴方を信頼したことを後悔しないですむように、貴方がそれを用いてくれることを少しも疑いません。」もはやフリードリヒは『反マキアヴェリ論』を執筆したことを後悔していたし、出版交渉で友人を煩わせてしまったことを申し訳なく思っていた。10月6日付のヴォルテール宛書簡(Br. V. 153.)には、次のように記されている。「実際のところ、マキアヴェリ論を書いたことを再考しています。というのは、それが貴方をヴァン・デュー



レとの争いに巻き込んで、貴方の二週間の生活にある種の破滅を引き起こしたからです。」

ヴォルテールの『回想録』には、自分が国王に出版を諫めたのだが、デューレが大金を要求したので、「もともと心の底では著書が印刷されることを悪くも思っていなかった国王は、印刷されないために金を支払うよりも、一文も出さずに印刷されることの方を選んだ」と記されている。この『回想録』は、両者が絶交した後に書かれたものであって、事実と反している。ハイデマンが正当にも指摘しているように、デューレは金銭を要求せずに、むしろ金銭の提供にもかかわらず印刷を続行したのであり、また国王は出版中止を自ら強く望んでいたのである。先に引用した書簡の文面からも、またヴォルテールが結局自分で出版したことからも、『回想録』の虚偽は明らかであろう。なお、ハイデマンはシュレージエン侵略と『反マキアヴェリ論』が矛盾するという前提のもとに、この時点でまだフリードリヒが侵略を考えていなかったことをも理由に加えているが、後述するようにこの前提は不当であり、これを理由に加えるのは誤りであろう。

その間に、デューレはヴォルテールに関わるのを止めて、ハーグで独自に出版を行なうことにした。これが『マキアヴェリ君主論の検討 (Examen du Prince de Machiavel, avec des notes historiques & politiques, à la Haye, chez Jean van Duren, 1741)』である。同時にロンドンでは、「ギョーム・メイエにより」出版されたが、これはデューレの変名であった。なお、「1741年」と記されているが、もちろん実際に出版されたのは1740年であり、9月末にはすでに市場に出回っていた。これに対抗する形で、ヴォルテールはさらに修正を加えて「唯一の真正版」を出版した。『反マキアヴェリ論、あるいはマキアヴェリ君主論に関する批判的試論 (Anti-Machiavel, ou Essai de critique sur le Prince de Machiavel, publié par M. de Voltaire, à la Haye, aux dépens de l'éditeur, 1740)』がそれであり、「序文」ではデューレが暗に非難されている。「ある者が競って写しを奪い、すでに非常に謝ったものが流布しているので、もし私が精確な版を作る労を取らねば、この作品は歪んだ形で出版されたことであろう。」このヴォルテール版には1740年という刊年が付されているので、実際とは逆にデューレ版より先に出版されたかのように見える。さて、デューレはこれに対抗するために『第三版』(「第二版」はヴォル

テールの版を指す)を企画し、自分の版とヴォルテールの版とを対比して印刷した上に、上述したヴォルテールからの6月1日付の出版依頼の手紙を付して公刊した。ところで、これら両者の版をフリードリヒが受け取ったのが、10月24日以前であったことは間違いない。10月24日付のアルガロティ宛書簡(OEuvres XVIII, 20)で、「私はマキアヴェリ論の二つの出来上がった版を受け取りました」とあるからである。また、10月17日以降であったことも確実である。10月17日付のヴォルテール発の書簡(Br. V. 159.)には、彼がフリードリヒに自分の版を送った旨が記されているからである。

これら両方の版を受け取ったフリードリヒの感想は、満足というには程遠いものであった。外見に関して言えば、デューレの版は当初の契約どおり、印字も大きく鮮明で、金縁の非常に美しい装丁がなされていたので、これを「芳しからぬ」と考えたわけではなかろう。10月26日にこう述べた段階では、フリードリヒがまだ両方の版を読了していなかった可能性は高いが、序論からして大幅に書き直されていたのだから、直ちに内容に不満を抱いたとしても不自然ではない。ヴォルテールに宛てた書簡(Br. V. 165.)でも、次のように述べられている。「私はくまなく『マキアヴェリ論』を読みました。けれども、実を言うと、私はあまりそれに満足していません。私はそこにあることが気に入らないものを変更して、それについて新版(une nouvelle edition)を私の目の下、つまりベルリンで出版することを決心しました。私は新聞に論説を(un article)掲載することにし、それにより『試論』の著者が二つの版(les deux impressions)を否定することになります。貴方には申し訳ないですが、他にしようがなかったのです。というのは貴方の版にはあまりに見知らぬものがあるので、もはや私の作品ではないからです。私は、第15章ならびに第16章が、かくあれかしと私が望んでいたものとはまるで違っているように思います。この作品を作り直すことは、この冬の仕事となるでしょう。」

しかし、この新聞論説は結局掲載されなかったし、まして新版の作成などは論外であった。神聖ローマ皇帝カール6世(Karl VI : 在位1711~40)が崩御したのである。1740年10月20日のことであった。フリードリヒがこの報せを受けたのは、4日後の10月26日であったという。後継者はカール6世の娘マリア・テレジア(Maria Theresia : 在位[オーストリア]1740~80)とその夫

のフランツ1世(Franz I:在位[皇帝]1745~80)であった。フリードリヒの対応は迅速であった。報せを受けたその日に書かれたヴォルテール宛書簡(Br. V. 162.)には、「リュティヒの仕事は片付きましたが、現今の仕事は全ヨーロッパにとって重大な影響をもたらすものです。ヨーロッパの旧政治体制を一変するときがきたのです……」と記されている。さらに、11月7日には、大臣ボーデヴィルスに秘かに軍隊の動員を指示している(Quellen 64.)。フリードリヒが作成した『国王がシュレージエンに侵入した理由の陳述』(1740年12月)という覚書(Werke V, 168)によれば、(1)大選帝候フリードリヒ・ヴィルヘルムはシュヴィーブのクライスを代償としてこの地域に対する権利を放棄したが、皇帝レオポルト1世が国王フリードリヒ1世から背信行為によりシュヴィーブを奪い取ったので、先の協定は無効になった、(2)皇帝は死去したので誠実宣誓違反にあたらぬ、(3)協定の無効により皇帝は領有権を喪失していたので、国事詔勅[全領土の一括継承を定める]には違反しない、(4)国事詔勅の承認はそもそもユーリヒ=ベルク領有の保証が条件であったが、皇帝家はこの条約を破ったので、担保として保証された皇帝自身の領地をいまや請求し得るし、国事詔勅の承認も無効である、(5)シュレージエンは元来は男子レーエンであったのを国事詔勅で女子レーエンにしたのだから、国事詔勅が無効である以上は女子の継承を認める義務はない、という5つの理由からして、侵略は正当化されるという。かくして、1740年12月16日に国王フリードリヒ2世はシュレージエンに侵入し、ここにオーストリア継承戦争が始まったのである。

この侵略は果たして不当なものだったのだろうか。初期近代の法学者たちは、戦争を正不正に区別する「正戦(iustum bellum)論」を主張していた。これは一定の法的要件(正当原因・正しい意図・正しい開始者・正しい戦い方など)を備えた戦争を正当な戦争とするものである。グロティウス(Hugo Grotius: 1583~1645)の正戦論によれば、戦争の正当原因は、①自己の防衛、②財産の防衛と回復、③債権の執行、④処罰であり、逆に、①より豊かな土地を求めるための戦争、②発見を理由に他に属する土地を奪うための戦争、③隷属する人の間の自由を求めるための戦争、④その意志に反して他の人を支配するための戦争が不正である。さらにまた、悪しき原因に基づいて戦争を行なっても、自ら正しいと信じ、しかもそれが不可避の事情による法律または事実の無知による場合には、「克服しえない無知(ignorantia invincibilis)として正当と認め

られる、という。フリードリヒの「侵略」は、たしかに不正要件の①に該当するようにも思われるが、先に挙げた「覚書」からも分かるように、彼自身はこの戦争を財産回復（正当原因①）だと考えていたのである。また、言行不一致を指摘する見解があるが、それが事実には反することは次の『反マキアヴェリ論』第26章からの引用を読めば分かるであろう。ちなみに、この第26章は、いみじくも「外交活動の様々な種類、および戦争の正当な原因について」と題されている。「それらは、予防的なものであれば、自ずと正当なものである。思慮は、人がその行為の主人である限りで、常に行動を奨める。それ故、オリーブの樹の枝〔平和〕と月桂樹の樹の枝〔勝利〕のうちから選ばねばならないのなら、侵略戦争に訴えるほうが、全てが絶望的になって、宣戦布告が完全な圧伏と没落の一時的な延期にすぎないような時期まで待つよりは、良いことである。」

さて、ここで問題となるのは、フリードリヒがヴォルテールに不満を表明した先の書簡の日付が、10月7日（ce 7 d'octobre）となっていることである。「二つの版（les deux impressions）」という言葉からみて、日付に誤りがあるのは間違いない。『書簡集』の編者は11月（novembre）の誤りだとしている。たしかに、書き誤りだとするのは不自然であるし、内容的に10月26日、つまり皇帝が崩御したことを知った日に書かれた、次の二つの書簡の記述に反するように思われる。つまり、冒頭に引用したアルガロティ宛の書簡に見られる「皇帝の死は私を芳しからぬ本の校訂者たらしめないのです」という言葉は、明らかに「新版（une nouvelle édition）」の出版を断念したということを示しているし、また、先に引用した同じ日のヴォルテール宛書簡（Br. V. 162.）の別の箇所には、「皇帝が死にました。……私は『マキアヴェリ論』の印刷を成し遂げたことを貴方に非常に感謝しています。私は、現在それに従事しようがなく、あまりに多忙なのです。私はまもなく熱を下げるでしょう、というのも、私は自分という機械を必要としており（j'ai besoin de ma machine）、そして今は可能な選択の全てをそこから引き出さなければならないからです」と記されているからである。

しかし、ここで注目すべきなのは、この書簡ではヴォルテールに出版を感謝していることである。同じ日に「芳しからぬ」という印象をアルガロティに洩らしていることからすれば、この感謝が心からのものであるとは考えがたい。

先に示唆したように、本を受け取ったのが2日余り前のことにすぎないことから、10月26日にはまだ読了していなかった、と仮定し、それ故に本人に対して批判めいたことを口にするのを避けた、と考えるのが自然ではないだろうか。そうすると、「私はくまなく『マキアヴェリ論』を読みました」という言葉でヴォルテールを難詰し始めたことと整合的である。したがって、11月7日であったかどうかは別にして、少なくとも10月27日以降に書かれたことだけは間違いないようである。だとすると、この書簡で述べられている「新版 (une nouvelle édition)」をベルリンで出版するという企画が問題になる。私の考えでは、この企画はヴォルテールに対する一種の牽制にすぎず、始めから実行不可能なものであった。新版が出版されなかったのは言うまでもなく、先に述べたように、現に新聞への「論説 (un article)」の掲載は実行されていないし、また先に引用した箇所に続く段階では、ヴォルテールに匿名出版の約束を想起させて、自制を求めているからである。「その間に、私との関係をあまり誇示しないよう願います、というのも、それは私にとって喜ばしくないからです。そのうえ、貴方は、私が貴方に手稿を送付したときに、秘密保持の厳守を求めたことを知っているからです。』『反マキアヴェリ論』の著者が誰であるか、本気で公にしたくなかったのならば、匿名にせよ「論説」を掲載したり「新版」を発表したりするはずはなからう。この書簡に示されているような牽制が必要だったのは、ヴォルテールがその「序文」にフリードリヒを示唆する記述を加えていたからである。「……この駁論の著名なる著者は、天が稀にしか創造せぬ偉大なる魂を持ち、その学説と模範により人類を徳へと導くものである。……彼はなおかなり若く、思慮と徳において自己を教育せんとしたので、自分自身にのみ講義を授けることを考えていた。けれども、彼が自己に授けたこの講義は、全ての国王に届くべきであり、全ての人の幸福の源たりうるものである。彼は光栄にも私に手稿を送って下さったが、これを公刊すべき旨を彼に請い求めるのが私の債務と考えた。マキアヴェリの毒は公衆の意識にあまりに深く存しているので、この書が解毒剤ともなるべきであろう。……極めて気高く情熱的で純粋な文体をフランス語で記したのは、フランスに滞在したことさえない若き外国人である……彼がイングランド人であれスペイン人であれイタリア人であれ、どうでもよい。ここでは彼の故郷ではなく書物が重要なのである。」

従来の解説では、皇帝の崩御による改訂作業の放棄と、「10月7日」付のヴォルテール宛書簡に記された「論説」の新聞掲載ならびに「新版」のベルリンでの発行との、前後関係が不明確なまま放置されていた。それによって何時の間にか、「『反マキアヴェリ論』の二つの版を読んで、内容に不満を感じ、それをヴォルテールに伝えると共に新版作成の決意を表明したが、皇帝の死により断念するに至った」、という図式が形成されていた。以上の論証により、この図式が誤りであって、「フリードリヒは、二つの版を一見して改訂の必要を感じたにせよ、両者を読了した時点ではすでに皇帝の死を知っており、したがって本気で改訂版の作成を検討する余地はなく、新版の作成云々はヴォルテールへの牽制にすぎなかった」、ということが示されたといえよう。

### Ⅲ 諸版の異同

本気で改訂する気がなかったとはいえ、フリードリヒが、出版された二つの版に不満を抱いていたことに変わりはない。しかしながら、フリードリヒの不満をよそに、『反マキアヴェリ論』はただちにヨーロッパ中に流布したのである。

さて、当時の書物の普及というのは、(しばしば著者に無断で行なわれた)複製によるものであった<sup>(18)</sup>。フリードリヒの生前に出された諸々の版については、ベルクマンが概観を与えてくれる。まず、デューレの『検討』(ハーグ：1741年 [1740年] および1741年；メイエという偽名で、ロンドン：1741年 [1740年] および1759年)に依拠したものは、アムステルダム (1741年)、ライプツィヒ (1742年)、ハーグ (1743年)、アムステルダム (1747年)、ジュネーヴ (1759年)、パリ (1765年)、出版地不祥 (1767年) があり、さらには『マキアヴェリ全集』第6巻 (ハーグ：1743年；アムステルダム：1748年および1750年) にも収録されている。増刷も合計すると、『検討』は40版をも数えたという。他方でヴォルテールの『批判的試論』(ハーグ：1740年)に依拠した版として挙げられるのは、ハーグ (1740年)、ブリュッセル (1740年)、コペンハーゲン (1740年および1741年)、ゲッティンゲン (1741年)、アムステルダム (1741年)、マルセイユ (1741年)、ロンドン (1751年) である。それ故、『批判的試論』は合計9版を数えることになる。両者を合わせると、生前だけでおよそ50版が出されたことになり、かなり流布した書物であったこと、またもっぱら普及した

のはデューレの版であったこと、などが分かる。以上はフランス語版についての集計であるが、少なくとも1779年にはナポリでイタリア語版が出されており、ドイツ語、英語、オランダ語、ロシア語、イタリア語、ラテン語、さらにはトルコ語訳までもが生前に出版されていたという。ちなみに、大王の没後の版については、『フリードリヒ大王全集』第8巻(1848年)に『検討』が収録された他に、少なくとも、『批判的試論』がジュネーヴ(1958年)で、『検討』がストラスブール(1789年)、ミュンヘン(1922年)、パリ(1985年)で、いずれの版か不明のものがベルリン(1795年)およびパリ(刊年不祥)で、それぞれ出版されている。また、『検討』がライプツィヒ(1991年)で翻訳された他に、いずれの版かは不明であるが、ライプツィヒ(1835年)、ベルリン(1870年および1913年)、イエナ(1922年)で翻訳が出されている。各種の『フリードリヒ大王著作集』にも収録されたことも考え合わせるならば、生前没後の各国語版を総計して、70版以上が出版されたものと思われる。

これらの版は、フリードリヒ自身の草稿と大幅に食い違っているにもかかわらず、「フリードリヒ大王の若き日の著作」として受け取られてきたのである。草稿は存在こそ知られていたものの、1834年にフリートレンダーが公にするまで部分的にさえ明らかにされておらず<sup>(10)</sup>、その全貌(ただし第二章は存在しない)に至っては1848年にプロイスが『全集』第8巻に収録して初めて、したがって出版後100年以上も経過してから、知られるようになったのである。これには『マキアヴェリ君主論の駁論』という表題が与えられている。表題に関して言えば、フリードリヒは(ヴォルテールも出版までの書簡では)この作品に一定の名称を与えてはいない。「マキアヴェリ論」や「マキアヴェリ君主論」などが最も多く用いられており、「反マキアヴェリ論」という言葉をフリードリヒが初めて用いたのはようやく1739年12月4日(ヴォルテール宛書簡: Br. V. 110.)のことにすぎない。言うまでもなく、ヴォルテールは出版にあたって「反マキアヴェリ論」という伝統的な名称(1576年にはジャンティエが同名書を出版)を採用したのだが、その後でさえ、フリードリヒの呼び方は一定していない。なお、プロイスが、『全集』にこの未知の草稿をデューレ版と共に収録する際に、草稿に『マキアヴェリ君主論の駁論』という表題を付けたのは、両者を区別するためであったが、この表題の通りにフリードリヒが言及した例はない。

さて、ゾンマーフェルトによれば<sup>(30)</sup>、この『駁論』の編集にあたって、プロイスは最も新しいと思われる草稿のみを利用しており、他の草稿を無視しているという。つまり、『駁論』はヴォルテールに送られた原稿（「第二草稿」）とは異なるものなのである。したがって、現在『全集』第8巻に収録されているのは、「第二草稿」にヴォルテールが手を加えてデュレーが出版した『検討』と、同様にこの「第二草稿」にフリードリヒ自身が手を加えた『駁論』、ということになる。「第二草稿」を始めとする各種の自筆原稿は、未だに公刊されていないため、ここで具体的にヴォルテールのなした加工について論ずることは出来ない。その概要について解明されていることを紹介するにとどめたい。

誰もがすぐに気付くのは、長さが極端に違うことである。『全集』では、『マキアヴェリ君主論の駁論』が136頁であるのに対して、『反マキアヴェリ論』（『検討』つまりデュレー版）はわずか105頁しかない。その上、先に述べたように『駁論』には第2章がないのである。1740年10月26日付のヴォルテール宛書簡（Br. V. 162.）において「まるで違っている」とされた第15および16章に至っては、それぞれ4分の1程度の長さになってしまっている。ヴォルテールはたしかに、冗長な表現を削り過度の罵言を除く、という点ではフリードリヒに貢献したといえよう。冗長な表現の削除は論旨を明確にしたし、マキアヴェリに対する罵言の削除は、道徳的・情緒的な叙述を減らし、論理的・客観的な印象を深めることに寄与したからである。けれども、頁の左半分にマキアヴェリの『君主論』を対照して印刷することを企画した関係から、ヴォルテールはフリードリヒの原稿のそれぞれの章を、『君主論』の対応する章とできるだけ同じ位の分量に抑えようとした。なるほど印刷の仕上がりは良くなったかもしれないが、形を整えるために必要な中間項さえも落としてしまうことで、論理的関連が不明確になり、結局は感情的表現を削除した効果を失わせているのである。さらに、ヴォルテールはフリードリヒが放置していた欠落を補完しているが、他方では、控え目にせよ自分自身の考えをも付け足している。フリードリヒは、自己の原稿の不完全さを知っていたが故に、それを先に引用した書簡（1740年4月26日付：Br. V. 125.）でヴォルテールに委ねたのだが、ここまで大幅に手が加えられようとは思ってもよらなかったことであろう。ヴォルテールによる修正の功罪は、次のハイデマンの言葉に要約されるであろう。「一般的に比較するなら、『反マキアヴェリ論』がヴォルテールの版でしか知られてこ



なかったことは遺憾であろう。それは修正によって文体の輝きを得て、フランス語になったのかも知れぬが、フリードリヒの原稿の独自性は、省略・修正・補完からは、ほんの少しの輝きさえ受け取らなかった<sup>(21)</sup>。」

続いて、デューレの版（『検討』）とヴォルテールの版（『批判的試論』）とを比較すべきであろう。しかしながら、残念なことに、私は未だ『批判的試論』を読む機会には恵まれていないので、ここでも一般に指摘されていることを繰り返すことしか出来ないが、『検討』の使用した原稿は、「第二草稿」にヴォルテールが一度目の修正を行なったものである。先に言及したヴォルテールの出版差止交渉の報告（7月10日付および日付不明のフリードリヒ宛書簡：Br. V. 139. u. 140.）では、政治的に問題になりかねない箇所を削除したり、各種の消極的抵抗を行なったりしたことが伝えられている。しかし、デューレは当時すでに印刷を開始していたし、草稿の写しを別に持っていたために、数箇所の削除を除けば抵抗は無意味であった。さて、ヴォルテールは、抵抗措置として『批判的試論』を出版する際に、二度目の修正を行なった。この修正は、「ある列強に不快感を与えかねない若干の箇所」を削除すべく行なわれた。ただし、そのような箇所は「若干」どころか「非常に多く」存したのであり、修正も大規模に行なわれた。外交的にみて特に問題となるのは、教会ならびに聖職者を批判する箇所や、ルイ15世の無能を嘲笑し、フルーリ枢機卿の術策を罵倒する箇所であった。この修正がいかに徹底していたかを示すのは、ヴォルテールが自己の版をフリーリ枢機卿に献呈したときに、枢機卿がこの書物を誉め讃えた、という逸話である。さて、この二度目の修正に際しても、ヴォルテールは再びフリードリヒの予期した以上の作業を行なった。文体の修正はさらに進み、結果として表現はさらに短くなった。ヴォルテールには、フリードリヒの文体はあまりに不真面目で、真剣な話題にも国王にも相応しくなり、あまりに直接的すぎるように思われたのである。それにもかかわらず、第20～25章には手直しがなされていない。例外は、統治能力なき君主に対する宰相選任の薦めに関する箇所（第22章）だけであり、この箇所は言うまでもなくルイ15世を刺激するので、二度目の修正の目的からして当然直すべきものであった。結局のところ、ベルクマンの言葉を借りれば、「ヴォルテールはおそらく疲れてしまったのだが、最後の諸章は、文体については、途中の諸章よりも均整がとれてさえる<sup>(22)</sup>。」

#### IV 第15章の検討

最後に、『マキアヴェリ君主論の駁論』と『反マキアヴェリ論、あるいはマキアヴェリ君主論の検討』との異同を具体的に検討し、フリードリヒの論法やヴォルテールの修正についての参考としたい。素材としては、フリードリヒ自身が特に不満を表明した、第15章を選ぶことにする。なお、まず『駁論』から引用して解説を加え、対応する段落があれば『検討』を付する、という順序で段落ごとに分析することにした。言うまでもないが、両者とも省略も順序の入れ換えもせずに、フランス語の原文から翻訳している。

画家と歴史家は次の点で同じである、すなわち、遙か後世に伝えるために、前者は人間の顔立ちや色艶を描き、後者は人間の性格や行動や精神史を描くことである。グラティアエ〔優美の女神〕の手に導かれて、その絵筆が美しき自然の無造作を正し、年月による傷を補い、原像の歪みを和らげる、そのような画家がいる。ボッシュエやフレシールの雄弁な叙述は一度ならず、そのとどめの一撃の機会を与えられている。彼らの叙述は、人間、それも偉人に属していなかった人々の傷を直し、英雄に等しいものにする。人間の醜さを捉えない画家の逆〔の画家〕もいる。彼らの色は非常に美しい顔色の白百合や薔薇を汚す。ギリシアのウェヌスやクピドの模写、プラクシテレスの傑作に認められるような最も整った輪郭や顔立ちを、彼らは誰だか分からない醜悪な人物にしてしまう。党派心は著述家をそれと同じ欠点に陥らせる。ダニエル神父はその『フランス史』で、宗教的なものに関わる出来事を全く歪めており、若干の新教徒の著述家は、かの神父様より少し穏健で少し賢明だが、歴史家の第一の責務が歪曲や贋造なしに事実を誠実に伝えることだとは思ってもせずに、真実を伝えていた非党派的な証言より、狂信が思いつかせた虚偽を好む臆病者であった。今述べた二種類とは別の画家は、歴史を虚構に混合し、地獄でさえ生み出し得なかった極めて醜悪な怪物を描写した。彼らの絵筆は、ほとんど悪魔の顔しか捉えないように思われた。彼らの画布は、最も豊かであると同時に最も有害な想像力が、地獄に落ちた者や地獄の怪物について陰鬱で残忍なものを創造した跡であった。カロやピエール・テストがこの種の画家であるが、著作家

ではマキアヴェリがこれにあたる。彼は世界を地獄のように、全ての人間を悪魔のように描く。この人間嫌いの陰鬱な政治学者は種全体に対する憎悪から全人類を誹謗しようとし、ないし徳を根絶しようとする、かくして大地の住人全てを彼の如くならしめようとしたのであろう。

この冒頭の段落では、画家と歴史家が対比され、その三類型が論じられている。第一類型は、人間の美を描く歴史家である。これを両者の理想像とするところに、歴史を君主教育の手段とし、未来を照らす光とするフリードリヒの歴史観が現れている<sup>(28)</sup>。第二類型は、党派心に左右される歴史家である。ここでフリードリヒは、下手な画家と対比することで狂信を戒め、宗派を越えた理性を説いている。第三類型は、悪意を持って歴史に虚構を織り混ぜる歴史家である。これがマキアヴェリであり、フリードリヒは彼の独創性を認めながらも、その叙述が人類に害をなすものだとして罵倒し退けている。ヴォルテールはマキアヴェリへの罵言を除去すると共に、大幅な削減を行ない、この興味深い三類型論を分かりやすいが単純な二類型論に変更してしまった。「画家と歴史家は自然を写すべきことで共通する。前者は人間の顔立ちや色艶を描くが、後者はその性格や行動を描く。怪物や悪魔しか描かない奇妙な画家がいる。」「マキアヴェリは世界を地獄のように、全ての人間を地獄に落ちた者のように描く。この政治学者は個人的憎悪から全人類を誹謗しようとし、また徳を根絶しようとする、かくして大地の住人全てを彼の如くならしめようとしたのである。」

マキアヴェリは徳について語るたびに、自分が少しも理解していないことについて議論する人々の物笑いの種になり、そのうえ他の箇所ですら咎めている過剰行為になる。というのも、若干の著作者はあまりに良い世界を創造したが、彼はひどく邪悪な世界を代弁したからである。酩酊における確たる原理から出発することで、彼はそこから誤った帰結にしか至り得ない。共通の中心なしには円を描くことが不可能のように、第一原理が真理でなければ正しく推論するのは不可能である。

フリードリヒは人々がマキアヴェリの「徳 (vertu ; vertu)」という用語を理解していない、と述べている。この点について、第6章には非常に興味深い

指摘がある。「『機会がなければ徳は滅ぶ』、これはこの極悪人にとっては、都合の良い環境がなければ腹黒い者も向こう見ずな者も才能を発揮出来ない、ということの意味する。」この解釈は、言葉こそ悪いが、実のところ今日の通説的な「ウィルトゥ」解釈<sup>(2)</sup>と軌を一にするものである。フリードリヒが如何に正確な読解を行っていたかが分かるであろう。また、批判を加える際に相手の矛盾を突いたり、事実誤認を主張したりしていることも注目すべきである。

この著者の政治倫理は、他者を野心の犠牲に供して、利害に適いそうな悪徳のみを持つことと、この世の悪辣さに適応して、さもなくば必至であるような破滅を避けることに帰着する。

利害 (l'interet) はこの政治体系の謎の言葉 [=鍵] であり、それはデカルトの渦巻やニュートンの重力のようなものである。マキアヴェリによれば、利害はこの世の精髓であり、情念 (des passions) に至るまで全てがそれに従わねばならない。けれども、人間がその情念を自己に与えたり廃したり出来る、と仮定することは、全く世界に関する認識に反している。人間の身体構造は次のことを照明している。すなわち、陽気、悲嘆、温和、憤怒、愛情、冷淡、節度ならびに放縱、要するに、我々のあらゆる情念は、我々の身体の一定の器官の按配にしか依存していないのであり、若干の微熱や若干の膜から多かれ少なかれ自由な構造、つまり我々の血液の凝固性や溶解性、その循環の軽敏さや緩慢さ、我々の心臓の強さ、胆汁の性質、胃の大きさ、などに依存しているのである。さて、私が尋ねたいのは、我々の身体のこれら全ての部分が嬉々として我々の利害の法則に従うかどうか、そして、そう考えることがそうではないと推測するよりも理性的かどうか、である。しかも、マキアヴェリは、カエサルの子よりもエピクロスの子を好む多くの異端者を知っているのである。

マキアヴェリが利害を人間行動の根幹に据えたのに対して、フリードリヒは生理学的に反論を唱える。人間の情念は利害に左右されるのではなく、我々の身体構造に由来するものである、と。ここには非常に唯物論的な見解が見られるといえよう。

自己におもねる情念と戦うことを理性的存在に奨める唯一の正当な理由、それは自己より引出され、社会の善性に資するような、善性である。情念は、それに身を委ねたなら我々を墮落させ、その歯止めを解いたなら我々の身体を破滅させる。情念を根絶できずとも抑制せねばならず、単に情念に対象を変更させることで、全て社会善への方角付けをせねばならない。そして、たとえ会戦で情念に勝たずとも、我々は、鍛練中の自制の出発点だと考えて、僅かな優位にも満足せねばならない。

フリードリヒは前段階で、情念の生理学的性質の指摘によりマキアヴェリの「利害」説を退けたが、それだけに満足しなかった。情念が利害に合致するわけではないことを示したとしても、それだけでは人間は身体構造に左右されるだけのものにすぎず、主体性は存しないからである。したがって、彼はさらに、その情念を公共善に資するよう理性によって制御することの重要性を唱える。つまり、彼は唯物論的な決定論を拒絶して、人間を不完全ではあるが非決定な存在であると考え、完全を目指して自らの情念を制御すべく自己を鍛えるべき存在、と規定しているのである。ここに彼のストア主義者としての性格が明確に示されている。また、人間の「善性」に言及していることは、彼が性善説の信奉者であったことを示唆しているであろう。

さらに、マキアヴェリがこの章で犯した極めて粗雑な矛盾を、読者のために指摘せねばならないだろう。彼は冒頭で、「もし人が為すことと為すべきこととが離れていて、ある人が全くその行動を人間の義務という考えに合わせ、人間の実際に合わせなければ、間違いなく破滅するだろう」、と述べている。著者はおそらく第6章で述べた仕方を忘れてしまったのである。[第6章で] 彼は述べている。「完全に自分が目標とした模範にまで到達するのが不可能な場合には、賢明な人間なら極めて偉大な模範だけを目標とせねばならない、完全に模倣する力がなくとも、少なくとも自己の行動に染色をなすことが出来るように。」マキアヴェリは、その記憶力の不確かさの故に哀れむべきである、その思想や推論の持つ相互関連や一貫性の乏しさをより一層哀れむべきでないならば。

マキアヴェリはこの章で「存在」と「当為」を区別し、政治においては「存在」を直視せねば破滅に至ることを説いている。フリードリヒはここでは、マキアヴェリ自身が常に「存在」についてのみ語っているのではないことを指摘して、矛盾を突いている。この箇所からも、彼がやみくもに非難しているのではないことが分かるであろう。

マキアヴェリはその誤謬と、その嫌悪すべき偽りの賢明さの諸原則をさらに推し進める。彼はこう主張する、人類が邪悪であり腐敗している世において、命を失わない限り、完全に善良であることは不可能だ、と。三角形が神を作るとしたら、神に三辺を与えるだろう、とある者が述べた。この邪悪で腐敗した世界は、まさにマキアヴェリの抱き続けているものなのである。

フリードリヒはさらに別の方向から批判する。「邪悪で腐敗した世界」はマキアヴェリが自己の対象だと言明している「現実」ではなく、「邪悪で腐敗した」マキアヴェリ自身の「似姿」に他ならないのだ、と。なお、ここで言及されている「ある者」とはモンテスキューのことであり、この一節は『ペルシア人の手紙 (Lettres persanes, 1721)』第59の手紙にある。フリードリヒはモンテスキューの著作についての詳細な欄外註釈を残しており、それを実証的に検討することは私の次の課題である。

さて、ヴォルテールはここで、人は善でも悪でもないが、君主は善良かつ賢明であることで実績をあげ称賛を受けることが出来る、と結論付けて章を閉じてしまった。したがって、この世が「邪悪で腐敗」しているという現実認識を正面から否定した箇所はなくなってしまい、フリードリヒの批判のより人道的・倫理的な側面が強調される結果になった。ヴォルテールが、この後のフリードリヒの議論を全く無視してしまった唯一の理由は、左に付する『君主論』の第15章に比して長すぎる、ということであつたろう。「マキアヴェリは主張する、人類が邪悪であり腐敗しているこの世において、命を失わない限り、完全に善良であることは不可能だ、と。だが私は言う、人類は滅びないために善良かつ賢明であらねばならない、と。人間は一般に、全くの善良でも全くの悪逆でもない。しかし、悪人も、善人も、中間の者も、力強く公正で拔目ない君主を尊

重する点では一致する。私は名君よりも暴君と、ルイ12世の如き国王よりもルイ11世の如き国王と、トラヤヌスの如き皇帝よりもドミティアヌスの如き皇帝と戦争する方が良い。なぜなら、名君は〔臣民に〕よく仕えられ、暴君の臣民は我が軍に参加するであろうから。もし私がアレクサンデル6世の如き教皇を討つため、一万人と共にイタリアに行くならば、イタリア人の半数は私の側につくだろう。もし私がインノケンティウス11世の如き教皇を討つため、4万人と共にそこに侵入したら、全イタリア人は私を滅ぼすために蜂起するだろう。善良かつ賢明な国王は、イングランドでも、決して大軍によって廃位されたことはない。そして、その国の悪逆な王たちは、紀律ある4万人の軍隊で戦争を仕掛けたわけでもない競争者の下に破れてしまった。それ故、悪人に対して悪人たるなかれ、そうではなく彼らに対して有徳かつ勇敢たれ。そうすれば、汝は自らの如く人民を有徳にするであろうし、隣人は汝を模倣しようとし、悪人は恐れるであろう。」

誠実な者は卓越した精神を持つことが出来るので、純真さを汚すことなくして慎重かつ賢明であることが出来る。彼の用心や洞察力は、敵の計画を自己に知らせるのに十分であり、方策に関する豊かな彼の知恵は常に、敵の害意が仕掛けた罠を自己に避けさせることが出来る。

フリードリヒは攻撃の手をゆるめず、悪人の中にあっても賢明でさえあれば相手の策略を見抜くことが出来る、という。彼は、単に善人であるだけでなく、敵の罠を見抜く力を持つことを要求しているものであり、但その洞察力の悪用を否定しているのである。

ところで、悪人の中で全くの善ではない、とはどういうことか？これは自ら悪人となるという選択に他ならない。全くの善ではない所から始める者は、事の常として、最後には全くの悪人である。これは、ドナウ河の運命を有する。この河は大地を流れることで良くなりはいしない。この河はスイスで始まり、タタールで終わるのである。

ここでフリードリヒは、先に自ら引用した『君主論』第6章に予先を変えて

いる。マキアヴェリの主張は、始めから達成出来ないことを見越して目標を立てれば、幾許かは成果を手に入れることが出来る、というものである。これに対して、フリードリヒは、始めから諦めていては達成どころか全く成果が得られない、誠実かつ真剣に努力してこそ成果は得られるのだ、という立場から批判する。

人はマキアヴェリの下で全く新しく全く奇抜な事柄を学ぶ、と私は主張する。『政治的君主論』を読む前は、非常に無知無学だったので、誠実な者に悪人になることが許される場合があるとは知らなかった。私は単純すぎて知らなかった、カティリナ、カルトゥーシュ、ミーア＝ヴァイのような人々が、世界に模範として役立っていようとは。私は、大多数の人とともに、徳において模範を示し悪徳において戒めを受け取るべきである、と確信している。

一体、真面目に議論せねばならないのだろうか、悪徳よりも徳の方が、嫉妬よりも慈愛の方が、背信よりも高潔の方が優れていると論証するために？私は考える、理性ある人はみな自己の利害を知っているので、両側のどちらがより適当であるかを感知するし、この問題を少しも疑わず比較検討もせず、逆に犯罪の側につくような者を嫌悪するものだ、と。

こうして第15章は終わる。以上の引用ならびに検討から、フリードリヒが『君主論』の論理をかなり正確に把握していたこと、批判に際しては論理矛盾を突いたり事実誤認を主張したりするなど、ただマキアヴェリの「現実主義」に倫理的に反発したわけではないということ、現在の『反マキアヴェリ論』理解にはヴォルテールの修正が非常に大きな意味を持っていたこと、などが容易に看取されることであろう。なお、紙幅の関係から取り上げられなかったが、第16章その他の章には、マキアヴェリの時代とでは政治的状況も異なり、また都市国家と大国を同列に論ずることは出来ない、などの相対主義的な批判が多く見られることも指摘しておこう。

略記表：Œuvres : Johann David Erdmann Preuss (Hrsg.), Œuvres de Frédéric le Grand, 31 tomes, Berlin, 1846-1857.



Br. V. : Reihhold Koser u. Hans Droysen (Hrsg.), Briefwechsel Friedrichs des Grossen mit Voltaire, T. 1-3. Leipzig 1908-1911. (Publikation aus d. preuß. Staatsarchiven, 81, 82, 86) Neudr. Osnabruck 1965.

Quellen : Otto Bardong (Hrsg.), Friedrich der Große, Darmstadt, 1982, (Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte der Neuzeit, 22)

Werke : Gustav Berthold Volz (Hrsg.), Die Werke Friedrichs des Großen, 10 Bde., Berlin, 1912-1914.

〔注〕

- (1) Wilhelm v. Sommerfeld, Die auβere Entstehungsgeschichte des "Antimachiavell" Friedrichs des Großen, in : Forschungen zur brandenburgischen u. preußischen Geschichte 29, 1916, S. 457-470.
- (2) Viktor Heydemann, Friedrichs des Großen Antimachiavell, in : Historische Vierteljahrsschrift 21, 1922/23, S. 60-75.
- (3) 福鎌忠恕訳『ヴォルテール回想録』大修館書店, 1989年。
- (4) Sommerfeld, S. 459.
- (5) 山内進『新ストア主義の国家哲学』千倉書房, 1985年, 46頁。
- (6) Sommerfeld, S. 463f.
- (7) Oeuvres VIII, Avertissement, p. XIV.
- (8) Sommerfeld, S. 162f.
- (9) Sommerfeld, S. 165 ; Heydemenn, S. 61f.
- (10) 『回想録』28頁以下。
- (11) Heydemenn, S. 64f.
- (12) Friedrich der Grosse, Der Antimachiavel, Nachwort (Helga Bergmann), Leipzig, 1991.なお, ヴォルテールの「序文」はこの版の独訳を使用した。
- (13) Heydemenn, S. 63. 一橋大学は初版の「普及版」を所蔵している。
- (14) Br. V. 1., S. 62 Anm. 1.
- (15) 伊藤不二男「『捕獲法論』におけるグロティウスの正当戦争論 一」国際法外交雑誌63巻5号, 19頁以下。
- (16) フリードリヒがマキアヴェリと違う表題を付したのはこの章だけである。ベルクマン (S. 123 Anm. 69) は, 第26章こそマキアヴェリの意図 (イタリア再興) を知る鍵であり, これを看過したフリードリヒの読解は不正

確である、と主張する。だが、マキアヴェリのメディチ家におもねる側面を見抜いたこと（第11章参照）、時代情勢の違いを指摘して論駁する方法を多用してきたことからして、まさにマキアヴェリにならって「プロイセン興隆」の鍵を論じたと考える方が適切であろう。

- (17) ゾンマーフェルトやハイデマンも誤解を与えかねない記述をしている。
- (18) 生前については, Belgmann, S. 132 ; Bibliographie zum Anti-Machiavel, ebenda, S. 146f. また, 死後については, Herzeleide u. Echart Henning, Bibliographie Friedrich der Grosse 1786-1986, Berlin-New York, 1988.
- (19) Anti-Machiavel ou Examen du Prince de Machiacel, Introduction (Gottlieb Friedlaender), Hambourg, 1834, S. V-XLIV.
- (20) Sommerfeld, S. 164.
- (21) Heydemann, S. 67f.
- (22) Bergmann, S. 136.
- (23) フリードリヒの歴史観については, 村岡哲「フリードリヒ大王と歴史」『フリードリヒ大王研究』所収, 培風館, 1944年, を参照。
- (24) クウエンティン・スキナー著, 塚田富治訳『マキアヴェッリ ―自由の哲学者』未来社, 1991 (1981) 年, 佐々木毅『マキアヴェッリ』講談社, 1978年を参照。